

国語教育で役立つ日本語文法を考える

山田敏弘（岐阜大学）

教育学部教員は、学校文法との比較対照において日本語文法を教えなければならない。この学校文法には、古典語を理解するという第一の目的があるため、一般の日本語学で議論される文法とは異なる点が多々ある。中でも困るのは、現代語から考えて多くの矛盾を含むことである。品詞分類も、活用表も、主語や格助詞の捉え方も、モダリティ表現も、矛盾に満ちている。無形の名詞修飾構造を教えないことなども表現力涵養の点からは残念である。

本発表では、これらの問題点に対し、日本語の文法を考える学会として静観するだけでよいのかを問いかける。矛盾点を改訂し世に問うことのみならず、これからの初等、中等、そして高等教育で重視されていくであろう思考力・判断力・表現力の育成のために、文法を利用した「考える文法授業」の利点を説く。

研究者だけでなく、多くの人に歓迎される文法を考えていくきっかけにしたい。

国語教科書における条件・譲歩表現の使用実態
— 年少者に対する日本語教育の基礎資料 —

松本理美(大阪樟蔭女子大学非常勤講師)・有田節子(立命館大学)

本発表の目的は、従来の文法研究で明らかになった条件・譲歩表現に関する知見を基に、日本語教育や作文教育に資するべく、その形式と用法に着目し、小学校・中学校・高校の国語教科書における条件・譲歩表現の使用実態を明らかにすることである。本研究で行った調査は、①学校種ごとの、条件節の節末形式「と」「ば」「たら」「なら」の出現頻度と、予測的条件文・総称的条件文・事実的条件文・反事実的条件文・認識的条件文の出現頻度、②譲歩節の節末形式の学校種別出現頻度、③1文あたりの接続節数と条件・譲歩節の現れやすさの関係、の3つである。これらの調査結果を基に行った分析、考察について発表を行う。そして、条件・譲歩節が文体特徴や文章レベルを捉えるための指標の1つとして有効であるとともに、年少者に対する日本語リテラシー教育のための基礎資料として、使用実態の調査によるデータが必須かつ有益なものであることを示す。

日本語の時制解釈と現在時制形態素の有無について

安井美代子（獨協大学）・浅山佳郎（獨協大学）

英語では、主節の命題態度動詞が過去時制の場合、補文節の状態述語の過去時制は(i)主節の事象時と重なる読み（いわゆる時制の一致）と(ii)それ以前の過去に成立する読みを持つが、日本語の対応文では(ii)のみとなる。英語の補文節に現在時制を使うと、(i)に加え、発話時にも補文節事象が成立するダブルアクセス読み(DAR)となるが、日本語の対応文は(i)のみとなる。時制の一致と DAR の有無は多くの言語で相関することが観察されているが、本研究は現在時制形態素の有無または義務・任意性から導けることを主張する。英語の(i)は、状態述語が持つ超時間区間の性質から主節の事象時と重なりうるという語用論的分析を採用する。日本語に現在時制形態素がないと仮定すると DAR が生じず、補文節の非過去が超時間区間の性質により主節の事象時と重なる(i)を表す。この分析は日・英・中国語の談話対照分析により支持される。

トコロダ文はどのような発話か
—トコロダ文における「強調」の正体を探る—

帖佐幸樹（福山大学非常勤講師）

本発表は、文末助動詞「トコロダ」における「強調」概念の解消を目指すものである。まず、「トコロダ」に関する先行研究の知見を踏まえ、「細かな局面を表す」仮説と「事態が発話者自身に関わることを表す」仮説を立て検証を行う。その結果としてどちらの仮説も「強調」概念の十分な解消には至らないことを述べる。

次に、「トコロダ」はそもそも、伝達を前提とした発話観では捉えきれない形式なのではないかということを提案し、「トコロダ」が持つ「微妙なニュアンス、あや」に着目し、トコロダ文は、発話者が「状況を踏まえると」という振りをあからさまにやってみせる発話であると主張する。このように考えることで、「トコロダ」の有無は、発話者が「状況を踏まえると」と振舞ってみせるか否かの違いとなり、「強調」概念を持ち出さずともその違いの説明が可能となり、「トコロダ」における「強調」という概念は解消される。

非飽和名詞から飽和名詞へ、飽和名詞から非飽和名詞へ
— 「類」概念への認知言語学的アプローチ —

氏家啓吾(東京大学大学院生)・田中太一(東京大学大学院生)

「あなたは作家ですか」という質問には答えられるが、「あなたは作者ですか」と尋ねられた場合、どの作品の話かわからなければ答えようがない。対象をカテゴリー化するには特定の何かを参照しなければならない「作者」のような名詞を非飽和名詞といい、その必要がない「作家」のような名詞を飽和名詞という。この区別は、語のレベルで指定された二値的な素性であるとされてきた。しかし、両方の用法を持つ語が存在することや、飽和名詞が臨時的に非飽和名詞として使われる場合があることは、この想定に再考の余地があることを強く示唆する。本発表では、(i) 具体例の観察から飽和と非飽和の多義性が体系的かつ大規模に存在することを示し、(ii) 飽和・非飽和の区別は名詞によるカテゴリー化の異なるモデル(「類・事例モデル」と「フレーム・役割モデル」)に基盤を持つと主張し、(iii) 「類」の性質を考察することで体系的な多義性を生み出す原理を説明する。

V方ヲスル構文における解釈の二重性
—構文文法的アプローチ—

小栗哲哉（大阪大学）

本発表では、(1)のように、動詞連用形に名詞化接辞「方」がついた名詞句を目的語とし、軽動詞スルが後続する構文（以下、V方ヲスル構文）について考察する。

(1) 彼は素晴らしい走り方をしている。

藤巻 (2020) が観察しているように、V方ヲスル構文は事象叙述解釈（(1)では「彼は素晴らしい走り方で今走っている」）と属性叙述解釈（「彼は走り方が素晴らしい」）が可能である。

本発表では、「V方ヲスル構文は、なぜ事象叙述と属性叙述の両方が得られるのか」という問いに対して、構文文法理論（Goldberg 1995 など）の枠組みから説明を与える。具体的には、(i) V方ヲスル構文は、事象型と属性所有型という2つの異なる形式・意味のパターンからなる「構文的多義」であること、(ii) 構文の解釈は、「V方」の意味構造に含まれる<事象>と<付随的特徴>のどちらが焦点化されるかによって決まることを主張する。

措定文の述語に現れる固有名詞の意味的性質

三好伸芳（実践女子大学）

固有名詞は、措定文の述語名詞句（叙述名詞句）として用いられる場合があることが知られている。一方、叙述名詞句となった固有名詞の意味的性質については十分に検討されてこなかった。そのような前提を踏まえ、本発表では以下のような言語現象を検討する。

(i) a. 甲： あのイヌは何ですか？

乙： あのイヌはマスティフ {です／と言います}。

乙'： あのイヌは盲導犬 {です／??と言います}。

(i) において、「盲導犬」の場合に限って「～と言います」という言い換えが許されないのは、聞き手が「盲導犬」という語彙項目名を知らないという状況が想定しにくいからであると考えられる。以上のような対立を元に、措定文の述語に現れる名詞は、広く「主語名詞句の語彙項目名が何であるか」を表示する場合があることを指摘する。

「予想的中」の意に解釈できるサレバヨ／サレバコソに関する考察
— 「事情推量」を観点として—

川村祐斗（名古屋大学大学院生）

本発表では、「予想的中」の意で訳されるサレバヨ／サレバコソが順接確定条件を表すサレバの1つの現われであり、サレバが意味変化して「予想的中」の意を新たに表すようになったわけではないことを、平安和文作品の例をもとに主張する。サレバヨ／サレバコソの使用例では「事情推量」が行われていると考える。「事情推量」とは事態成立の背後にある事情・意味に関する推量のことである。たとえば「地面が濡れている」という既実現事態に対して、「昨夜雨が降ったんだろう」等と意味付ける推量である。サレバヨ／サレバコソが「予想的中」の意で解釈される例では、必ず何らかの既実現事態を受け、その事態に対する意味付けを行っているといえられる。すなわち、「事情推量」が行われている。「事情推量」の例が通常の場合の順接確定条件のサレバにも見られることから、「予想的中」の意に解釈できるサレバヨ／サレバコソは、順接確定条件のサレバの1つの現われであると言える。

「～てのける」の意味・機能について

井上直美（埼玉大学大学院生）

本発表では、「大谷選手は投打守の三刀流をやってのけた。」のような、動詞のテ形に後接する「のける」の意味・機能について述べる。コーパスを用いた探索型アプローチで、現代日本語の「～てのける」の使用実態を明らかにし、加えて、その変遷についても考察する。

本発表の主張は以下の3点である。①「～てのける」には意味の抽象化が見られ、ヲ格補語のタイプ別に連続性と段階性が認められるが、使用分布には大きな偏りがある。②現代日本語の主用法は、観察者視点の「逸脱型」で、話し手の驚きや評価を含意する。「逸脱型」の表す「普通ではないことを実行する／達成する」という意味は、具体的内容を表さない動詞「やる」と「言う」の2つで網羅でき、「やってのける」、「言ってのける」の形で「語」になりつつある。③通時的観点から見ると、現代日本語と同じ前接語の傾向が見られるのは、明治期の資料からである。それ以前には異なる特徴が見られる。

近世後期洒落本に見る丁寧語の運用とその地域差
—上方と江戸の対照—

森 勇太（関西大学）

本発表では、近世後期洒落本における丁寧語の運用を通して、待遇表現や言語的な対人配慮の地域差が形成された過程について考える。近世後期洒落本に表れる遊女から客への丁寧語使用を見てみると、その使用のあり方には高頻度使用と低頻度使用があるが、江戸に高頻度使用者が多いのに対し、上方には高頻度使用者は少ない。高頻度使用者については、形容詞・名詞でも丁寧語の使用率が高く、また従属節においても多くの節で高い使用率であったが、低頻度使用者は江戸・上方ともに動詞以外の品詞の丁寧語使用率が低く低頻度使用者は丁寧語率が低い傾向にある。このような丁寧語使用の地域差は、上方は地域方言の素材敬語の使用で聞き手配慮も十分果たされるため、丁寧語の必要度が低かったのに対し、江戸語は基層の方言で敬語がないため、節度を保ちながらも親しさが求められる会話においても、丁寧語の高頻度使用が早く浸透していったという過程を反映していると考えている。

使役性を用いたテ形節の構文分析

崔チョンア（金沢大学非常勤講師）

本発表の分析対象は、複文における使役構文である。そして、テ形節の分類において従位接続とされる「付帯」および「継起」用法の下位分類である「認識的継起」は、話者の主節における動作主(使役主体)の意図の捉え方である「認識的先行」(崔 2018)に基づき、広義の使役性を有する使役文の一種であると主張する。

さらに、従来の他動性を広義の使役性として包括させ、(1)他動詞による2つのタイプの単文構造を使役構文の全体像の起点として考える。そして、(2)従来の単文における使役構文および(3)本研究の分析対象であるテ形節の複文構文までを統合し、使役状況を取り巻く構文の連続性について発表を行う。

[参考文献] 崔チョンア(2018), 「韓国語の「-eoseo」・「-go」形節の意味類型と統語構造」, 朝鮮学会『朝鮮学報』248 輯, pp.(1)-(42).

自他対応の移動動詞と場所名詞句との格結合頻度について

趙 金昌（筑波大学大学院生）

本発表は、格結合頻度の観点から、自他対応する移動動詞を検討したものである。従来、移動動詞についての研究は自動詞を中心に進められてきた。恐らく自動詞の移動動詞の分析がそのまま他動詞にも当てはまるとされるため、他動詞についてはあまり研究されてこなかったと考えられる。本発表では、散布図を用いて移動と自他の対立がどのように関わっているのかを図示した。調査の結果、自他で移動の対応が変わらないものが多いが、タイプが変更されるものも見られた。変更する場合、一定の傾向性を示した。

- ①他動詞の方が着点を注目する傾向が強くなるが、自動詞では他動詞より着点を注目するもの「転がる」「落ちる」
- ②自動詞では他動詞より起点を注目するもの「落ちる」「おりる」
- ③自動詞では他動詞よりプロセスを注目するもの「離れる」「下がる」など

感情・感覚表現に付加される高平調の「あー」

落合哉人（筑波大学非常勤研究員）

本発表は、感情・感覚に言及する発話において高平調で発声される(1)のような「あー」を取り上げるものである。発表の前半では、このような「あー」が、出現位置・共起する要素に関して、発見・言いよどみ・指示を示す同一形式・同一音調の「あー」と異なる特徴を持ち、ア) 非伝達的である、イ) 話し手自身が当事者である体験に基づく、ウ) 参照される体験が開始してすぐでも完全に終了した後でもない、という3つの条件を満たす発話で現れることを分析する。

(1) (一仕事終えて) あー、しんどかった。

また、発表の後半では、このような「あー」が「話し手の実体験に対する感想としての感情・感覚である」という意味を後続する表現に付加することを論じる。さらにそのような意味のあり方は「嘆息／感嘆」を示す下降調の「あー」の意味と違うことを考察する。

長音化した単音節語「まあ」に内在する意味について

松岡みゆき（愛知文教大学）

本研究は単音節「ま」が長音化され「まあ」と表記される形式が運用された場合の意味について、その副詞的用法に該当する例を考察し、感動詞的用法に該当する例までを包括して統一的に捉え得る意味記述を行う。「まあ」の使用例は分出内容が特徴的であり、それは 1) 判断 B の一部を示す、2) 判断 B の理由を示す、3) 判断 B の例外を示す、4) 判断 B とは別の判断の存在を示すというものである。ここから「まあ」は「外界事象 A に対する判断 B を、その関連事項から成る可能態と捉え、その一部を取り出したことを示す形式である」と捉えられる。これが「判断の厳密性・完全性を弱める」「『驚き』を表現する」ことにつながる。従来の研究で「まあ」に関してなされた「概言」「とりあえずの反応」「計算処理の曖昧性」「複数の選択肢」といった指摘は全てそこから導出される運用上の結果として捉えられる。

「アップルパイにリンゴが大きく入っている」
-モノの存在のサマを表す形容詞連用修飾-

井本 亮 (福島大学)

本発表は「アップルパイにリンゴが大きく入っている」のような〈モノの存在のサマ〉を表す形容詞連用修飾の事例について考察し、以下を主張する。

第一に、大規模コーパスでは被修飾成分の動詞がテイル形に偏って現れる。動詞テイル形では「お客が来ている」のように知覚されない〈過程〉を言語化してモノの〈存在〉を表すことがあり、〈モノの存在のサマ〉の解釈もこれに起因する。第二に、この修飾関係が生じる動詞文では、二格句に空間としての典型性の低い〈場所〉が現れる。形容詞連用成分は〈対象〉のモノのサマの詳述を介して〈場所〉を特徴づけることで事象の描写の機能を果たす。動詞文の成立条件と形容詞連用成分の意味的特徴が整合した事例と言える。

本発表の議論は、事象の空間性に関わるその他の形容詞連用修飾の事例を再照射する可能性があり、より広範な形容詞連用修飾の記述的研究を喚起することも展望される。

日本語の副詞モウと否定の階層関係

ーモウ、モウスグとスグー

宮田瑞穂（東京大学大学院生）

日本語の副詞であるモウ、モウスグ、スグは運動動詞の非タ形と共起し、事態の実現が近いことを表す。一方、否定文において、モウは今後事態が繰り返されないという意味を表し、スグは事態実現が即時的でないことを表す。モウスグは否定文と共起できない。モウとスグが否定文において異なった意味を表すのは、モウは命題の外に現れ、スグは命題の内に現れるためである。さらに、モウは「段階の推移（金水 2000）」を表すため、否定文と共起した場合、移行する前の段階が状態的であることを要求する。そのため、モウは否定文において「非反復相」を表す。また、モウスグが否定文と共起できないのは、事態の実現を含意するため、状態的な述語と共起しないためである。

金水敏（2000）「時の表現」, 金水敏, 沼田善子 & 工藤真由美, 『時・否定と取り立て』（1-92）. 岩波書店.

「せっかく」の構文的条件について

周世超（重慶大学）

「せっかく」は話者の評価を表す「評価の副詞」として知られている。また、「せっかく」は「せっかくここまで来たのに」のような動詞述語文を修飾する場合もあれば、「せっかくのお誘いですが」のような連体詞「の」と共起し、名詞述語文を修飾する場合もある。さらに、「せっかく」は「せっかくだから」のような述語としての役割を果たす場合もある。しかし、それぞれの場合において具体的にどんな構文的条件を有しているかに関する研究はまだ見られない。そこで、本発表では、「せっかく」の被修飾語の主体に焦点を当て、「せっかく」の構文的条件を浮き彫りにする。

いわゆる「部分否定」のハの意味構造と統語構造

井戸美里（国立国語研究所）

本発表は、「全員ハ来なかった」のようないわゆる部分否定を表すハの意味構造と統語構造を分析することを目的とする。先行研究では、部分否定のハは意味的にハ句が否定のスコープに入っており、意味構造と統語構造が対応関係を持つという一般的な仮定のもと、統語的にも動詞句内という否定辞句より低い位置に位置付けられてきた。一方本発表では、ハが部分否定を表すのに否定辞が必須ではないことを指摘し、ハ句はむしろ否定辞より高い統語的位置にあり、非到達を表す述部と組み合わせさせて、「ある想定された程度について言えば、その程度には到達しない」というような形で部分否定を表していることを主張する。本発表の分析によって、現象をより正確に捉えることができるだけでなく、主題のハと部分否定のハはいずれも動詞句より高い統語的位置にあり、述部はハが付加した要素に対する叙述になっているという共通点を捉えることができる。

接続表現ではない文頭の「ト」は何をしているか
— 引用との比較 —

高谷由貴（神戸市外国語大学）

本発表は、例のような文頭に見られる「ト」を観察し、先行研究における「引用」「接続表現」といった区分では定義できない「まとめあげ」という用法が見られることを示し、その実態を明らかにするものである。「…総理大臣辞職なさるそうで、さすがにこっちは気まぐれでやってるんじゃないだろうけど（；^ ^）まあ庶民からすれば気まぐれにも見えますなあ～●と、そんな前置きは置いといて」（OY03_03852, 160/Yahoo!ブログ/2008）引用との異同という観点から、まとめあげのトが具体的な発話の再現ではなく、説明などの長く続く前文脈を受けて話題をまとめたり、転換したりする際に用いられることを述べる。さらに、談話・文章中での出現位置及び使用状況から「話題の提示」「話題の転換」「話題の概括」の三パターンに分けて分析し、文学作品等ではなく、ブログ・講演の場合に多く使用されることを指摘する。

談話をまとめあげる談話末のモ

榎原実香（東京工業大学）

本研究は談話におけるモの機能を検討することを目的とする。談話に現れるモは(i)話題の最後に位置している、(ii)すでに言及されている要素に付加する、(iii)モをもつ句が文の真偽値に関わる概念的意味をもたないことが特徴的である。本発表では、とりたて詞モの統語的・意味的性質から、談話のモが談話をまとめあげる談話標識として機能するしくみを明らかにする。モの統語的特徴から、談話のモは談話末に現れており、D類の段階を越える談話レベルに位置することを主張する。さらに、モの意味的特徴から、談話のモの範囲が包括する談話全体に広がり、談話の中の発話全体がとりたてられることで、談話をまとめあげる機能をもつことを主張する。観察した談話では、話題が停滞した後に談話のモが現れる。談話のモは、前文脈をまとめあげることによって話題が発展しないことを婉曲的に示し、話題を終了させる談話標識としてはたらくと考えられる。